



図3 (左から) オオカナダモ、コカナダモ、エビモの分布

主な種の分布について

図3には、オオカナダモ、コカナダモ、エビモの分布を示す。オオカナダモ、コカナダモともに円山川水系に多産する。エビモも同様であるが、上～中流域で河床が平らになり、流れのややゆるやかな所に限られた。オオカナダモ、コカナダモの分布のもうひとつの中心は、西部の岸田川水系(浜坂町)であった。

オオカナダモ、コカナダモの分布拡大の一因として、琵琶湖産の放流アユとともに広がるということがしばしば指摘される。しかし、アユを放流するとは到底考えられない小河川にまでこれらの帰化水草が侵入しているのが見られた。水草はどうやって川を逆上するのかという疑問がここでも登場する。

一方で、水草が生育可能と思われる場所がいくらかもあるのに、水草の入っていない川もある。今回の調査では矢田川水系と佐津川がそうである。前者は水量豊富で自然のよく残った美しい川なのだが、水草の影すらない。何故水草が生えていないのかを問うことも、水草の生態を考える重要なヒントになるにちがいない。

他の種の分布については、生育地が少ないこともあ

て、特に言及すべき傾向は認められない。なお、バイカモが1地点で記録されたが、中国山地東端に位置する但馬地方にはバイカモの生育する細流が他にも何ヶ所か知られていることを付記する。

おわりに

ため池の水草に地域性があるように、川の水草にも地域性があると私は思っている。但馬地方の河川の水草を他の地域と比較した場合、ササバモ、ホソバミズヒキモ、セキショウモ類などが全く出てこなかった。日本の河川の水草研究は欧米に比べてあまりにも少なく、川の水草フローラの特徴を他の地域と比較して論ずるのは今のところ不可能である。今、日本では河川そのものが危機にある。河川の水草についての基礎的な調査が、各地で早急に行なわれることを望む所以である。

なお、今回の調査のきっかけは、浜坂町田君川にバイカモの大群生地があるということ京都大学理学部の村田源先生に教えていただいたことである。末筆ながら記して御礼申し上げます。

○正俗編著『中国常見水田雑草』(重慶出版社、重慶、1983年5月第1版第1次印刷、B5判、265ページ、3.11元)

中国の水生植物の本は「中国水生維管束植物図譜」と「中国水生高等植物図説」が1983年に出版されている(水草研究会報16号)。同年にもう一冊、標記の本が出版されていたので、追加紹介する。

本書は水田の雑草として認められる植物の科と属の概説、種への検索表、各種の説明と図から成り、前の2書

が維管束植物あるいは蘚苔植物以上(輪藻植物は附録として収載)を含むのに対して、本書は輪藻植物1科、蘚苔植物1科、羊歯植物6科、双子葉植物20科、単子葉植物14科の計42科209種を収録している。各種の説明も形態の他に生態分布、応用等に詳しく、また図が甚だ親切で、前の2書はもとより、中国高等植物図鑑よりも詳細で、中国植物誌の図に匹敵する。ただ水田の雑草であるからガマ科などは入っていない。(浜田善利)